

わたしが空間演技を結成したのは25歳になった1970(昭和45)年であった。

3月には大阪で日本万国博覧会が開会した。3月31日には赤軍派の学生が、日航機よど号を乗っ取った。

6月22日には日米安保条約が自動延長されたが、1960年の安保闘争のような大規模な反対運動は展開されずに終わった。「ディスカバー・ジャパン」の言葉が示すようにレジャーブームが泰平の世を謳った。

わたしはたった二人で空間演技を結成した。前に所属していた劇団三十人会の仲間も参加してくれた。

処女作の『トンテントン』や『ひゅうらひゃあら』を喫茶店で上演したりした。

新宿ノアノアである。楽屋は非常階段であった。客は4、5人しかいなかった。だれもが寒さに震えていた。

しかし、存在を証明するには演劇しかなかった。

75年に『倭人伝』を俳優座劇場で上演した。すでに、5年が過ぎていた。

『倭人伝』は、西の果ての肥前松浦を舞台に、海の男たちと炭鉱の男たちが一人の女を巡っての抗争を描いたものである。全編をトランペットのテーマ曲が貫いた。

この舞台には俳優小劇場の養成所のメンバーも参加してくれた。彼らも劇団に違反していた。

きたろう、大竹まこと、風間杜夫、いまでは錚々たる連中である。この舞台が評判を取った。

先日亡くなった朝日新聞の副田昭彦さんは週刊朝日や新聞で「久々に大型新人登場」と特集を組んでくれたりした。

そして、青年座や文学座、俳優座から執筆依頼があったのである。青年座に書いたのが『肥前松浦兄妹心中』である。

この戯曲で岸田戯曲賞を頂いた。白水社から戯曲集『肥前松浦兄妹心中』を出版してもらった。

「まさか、本になるとは」。信じられないような、天にも昇る気持ちであった。

それからラジオドラマで『精霊流し』の原型となる『おぼろ松浦面白斬(おもしろばなし)』を書いた。

それやこれやとやっていた時にカフェアトロ新宿もりえーるで「一ヶ月のロングランをやらないか」との打診があった。

言葉と肉体と想い。一ヶ月、休みなしの40ステージのロングランである。キャバレーがあった跡の劇場である。

タツパは高く二階席までであった。「寒いことになりましたねえ」「ああ、修羅場だなあ」が、そのまま題名の『修羅場にて候』

になった。それまでは西の果ての松浦弁で書いていたが、この作品では関東の着者の言葉にした。架空の土地ではあるが、川崎あたりを頭に描いていた。

これも対立の物語である。登場人物一人ひとりに恨むべき過去や人間や現実がある。なぜボクシングを題材にしたのか

は忘れた。ただ、ボクシングを題材にした日活映画は中学や高校時代によく観ていた。石原裕次郎の『勝利者』などが

イメージにあったのかもしれない。それと俳優の赤穂善計の身体つきがボクサーを演じるにはぴったりであった。

その頃、彼は空間演技の主演を演じ続けていた。劇団員は6ヶ月もの間、ボクシングジムに通った。

面白いエピソードがある。時折、わたしもボクシングジムへ見学に行った。ジムのトレーナーが劇団員の一人ひとりを指

差し「あの人はいい役者でしょう」「あの人は不器用なはずです」といった。そのどれもこれもがぴったりとあたっていたの

である。驚いた。

稽古に入ると赤穂善計は体重を10キロ近く落とした。一日にメロンを一切れしか食わない。

「メロンは高いから、トマトにすればいいじゃないか」というと「デリカシーのない人だなあ」といった目つきをしてわたしを

睨んだ。「メロンでなくてはいけないんです」。どうしてそうなのか、わかったようでわからなかった。

今回、岡部大吾の演出で『修羅場にて候』が蘇る。34年の時を経て現代に蘇る。今回の連中も、ジムで相当鍛えている

らしい。

近年、わたしはプロデュース公演に専念していた。岡部企画である。これは1990年、当時松浦の市長が下北沢の本多

劇場まで訪ねてみえて「松浦市に演劇ホールを造る。あなたのために造るようなものだ。華やかな松浦を」とおっしゃっ

た。つまり「空間演技」ではない舞台をの意図である。

スターを入れるの意図である。それが岡部企画である。もう、とっくに岡部企画にもスター主義はない。

それまでは、暗い松浦ばかりを書いていた。設計図を見て驚いた。二千人のホールである。わたしは五百人の中劇場

にするように意見具申した。今回の『修羅場にて候』の出演者はそのホールに出演した人ばかりである。今井徳太郎や

中島文博、小池雄介は10年はやっている。他の人も4、5回はしごいた連中である。

空間演技が大吾の演出で復活する。わたしは遠くから眺めているだけである。新しい『修羅場にて候』で新しく空間演

技が復活するのである。こんな喜ばしいことはない。継続を願うのみである。